

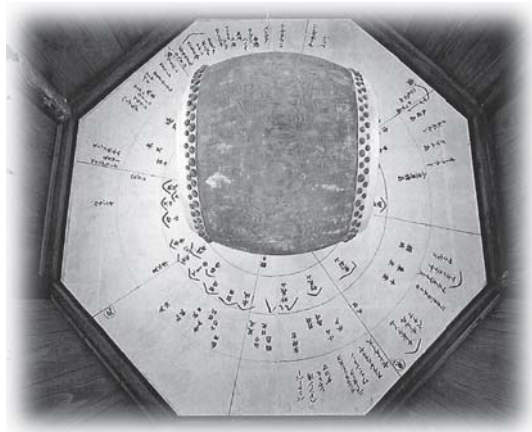
残された請負契約書（重要文化財）には、代治郎と世話役古間菊藏、小林清作、長坂富藏らが署名、異常に安い人件費「三四〇円」が記されている。

木材、瓦、麻縄、釘、来客の接待費、駄賃に至るまで千二百件にも上る支払い明細は明らかだが、その中になぜか代治郎への支払は見当たらない。

学校の建設は、一八七五（明治8）年に始まり、四月に地鎮祭、七月に上棟式を行い、松本の開智学校に先立って、同年十二月二十五日には新校舎が落成し、仮校舎となっていた小林寺から移転、開校した。

アメリカに渡って広い世界、とりわけ欧米の建築技術を学んだ代治郎が建てた中込学校は、当時まだ珍しかったペンキ、鮮やかな色ガラスが使われ、和洋折衷の「ギヤマン学校」と呼ばれ、見学者が絶えなかった。また、佐久平を一望し、天を衝くような太鼓楼の天井には、こどもたちに世界に目を見開かせるかのよう

に、国内外の山々、東京やニューヨーク、ローマ、パリなど主な都市の名前が書かれた方位図が描かれていた。



太鼓楼の天井に描かれた方位図

この学校の建設費六〇九八五二銭八厘のほとんどは、村内の寄付金で賄われたが、最低でも二戸一円という負担は、当時の小作農家などにとって決して軽いものではなかった。

しかし、「文明開化という教育を洋風校舎という新しい革袋に盛ることが必要」と、洋風校舎の建設を村民に提案し説得した用掛の小林豊次郎や、進んで資金を拠出した植松吉郎、小林藤九郎、関口宇兵衛ら資産家の存在なども村民が力をあわせる原動力となり、様々な困難を乗り越え、一年を経ずに校舎を完成させた。中込学校は、こうした村民の思いに共感した代治郎

の故郷への贈り物とっていいのではないだろうか。中込学校以外に、代治郎が建てたと分かる建築物は残されていない。

後に代治郎は名古屋に赴き、石鹼工場を起したが、濃尾地震で壊滅的な被害を受けてしまった。その後、和歌山県で花崗岩の加工、みかん酒の製造なども手懸けるが、大きな成果は得られないまま同県有田郡鳥屋城村（現有田川町）で七一歳の生涯を終えた。

●太鼓楼が人を育てた

いまでも青空高く聳え、先人達の思いを伝える太鼓楼は、村の指導者や教育者など多くの人材を育ててきた。

近くは、中央歴史学会で大きな役割を果たした教育者の市川雄一郎、その後輩で教育者・郷土史家として活躍した小林尚二、生涯を農村婦人の地位向上に献身した丸岡（旧姓・井出）秀子、その同級生で代治郎の曾孫にあたり、地域に短歌を広めた教師・竹内（旧姓・小林）すけじらがいる。

（小林濱治郎）

参考文献

- 佐久市志編纂委員会『佐久市志』佐久市志刊行会
- 長野県『長野県史』長野県史刊行会
- 小林尚二『中込学校創建略記』
- 『重要文化財・旧中込学校』佐久市教育委員会
- 『重要文化財旧中込学校々舎修理工事報告書』



旧中込学校は、明治初期の旧態をとどめた貴重な洋風校舎の遺構として、1969(昭和44)年に国の重要文化財の指定を受けた。

佐久の先人たち③

旧中込学校を建てた棟梁

いちかわ だいじろう

市川代治郎

(1826~1896年)

江戸末期、築地西本願寺修復で自信を得た市川代治郎は、アメリカにわたって洋風建築を学んだ。帰国後郷里の学校建築の設計・施工を引き受け、現存する洋風学校建築では最も古い中込学校を完成させた。

●欧米の建築技術を学ぶ

市川代治郎は、一八二六（文政9）年八月五日南佐久郡下中込村（現佐久市中込）石神の名主市川八郎右衛門の二男として誕生し、幼名は林藏といった。

二二〜二三歳、一八四八（嘉永元）年前後の頃、代治郎は思つてゐるあつて宮大工を志し、京都本願寺の棟梁水口若狭守に入門を許され、ご用役大工の鑑札を受けると名工の高かつた隣村の野沢中小屋の小林源藏長主之助に弟子入りし、大いに腕を磨いた。

源藏が東京築地西本願寺修復の棟梁に推挙され、他

の工匠を指揮した際、代治郎は脇棟梁の重責を担っていたが一八五八（安政5）年八月、工事半ばで師匠が急死、代つて代治郎が指揮をとり工事を完成させた。

この際知り合ったアメリカ人ケルモルトに見込まれて雇われ、一八六九（明治2）年三月に四四歳で渡米カリフォルニア州のスクラメントで欧米の建築技術を学び、一八七三（明治6）年六月に帰国した。

その頃、中山道板橋から荒川を渡るには渡し船だったが、ここに埼玉県と東京府の間で戸田橋を架ける計画があることを知り、代治郎はアメリカで学んだ新技術「吊橋」による架橋を、大久保一翁東京府知事に申し、埼玉県と掛け合つてほしいと提案している。

また、付属の建言書では「ご用仰せ付け頂ければもう一度スクラメントに行つてしっかり調査してきます」と言い切り、相当の自信、覚悟の程を示している。

結果として、代治郎の吊橋案は採用されず、木橋による架橋案に決定してしまつた。幻の吊橋計画絵図面、東京府への上申書の下書きは現在旧中込学校に保存、展示されている。

近現代建築史が専門の藤森昭信博士は、「戸田橋の設計図は斜張材の張り方、アンカーの入れ方など細かいくらまで本式」であり、この後建設された中込学校については、「全国にも例が少ない縦長・ベランダ付きの形式をとっており、同時代のアメリカの地方の

小学校が、縦長・ベランダ付きを特徴としている事実と共通している」とし、「欧米に学んだ日本で最初の大工になるのでは」と述べている。

●生まれ在所に祭り屋台

帰朝後、妻子を村に置いたままだった代治郎は、感謝の意を込め、自らの手で鶴と亀の飾りや、石神の「石」という字を彫り込んだ祭り屋台を村に寄贈した。この屋台の車輪や飾りの一部には白ペンキ、組み子は漆塗り、屋根には障子をはめるなどの特徴があり、現在は旧中込学校に隣接する資料館に展示されている。



復元された祭り屋台

●郷里に学校を建てる

そんな折、たまたま郷里に持ち上つた学校建設計画は代治郎にとって大きな朗報であった。アメリカ四年間の実績には自信があり、当時政府は西欧の模倣を大いに奨励していたから、洋風校舎の設計・施工は、代治郎にとっては故郷に錦を飾る大仕事だったと言える。